

曾祢崎遺跡発掘調査報告

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、三重県多気郡明和町上野字曾柿崎に所在する曾柿崎（そねごき）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成7年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第6分冊である。
- 3 調査は、平成7年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
技師 西村（旧姓 野口）美幸、研修員 袖岡直樹、
技術補助員 山田康博
- 4 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下のものが補助した。全体の編集は西村が行い、執筆は西村・山田が行い、目次に分担を明記した。写真は西村・日栄智子が撮影した。

足立純子、石川芳子、石橋秀美、井山美奈子、井村浩子、柿原清子、川口愛、楠純子、
倉田由起子、小林住代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、
中川章世、中山孝子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、
松川浩子、森島公子、柳田敬子
- 5 調査にあたっては、明和町在住の各位、明和町教育委員会、および県農林水産部農村振興課、松阪農林事務所、農業開発公社にご協力をいただいた。

また、奥義次氏（松阪高等学校）、久保勝正氏（上野商業高等学校）、森田幸伸氏（明和町教育委員会）、上村安生氏（斎宮歴史博物館）にはいろいろなお教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 6 挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、座標北の方位は真北に対し西偏 $0^{\circ}18'$ 、磁北の方位は真北に対し西偏 $6^{\circ}20'$ （平成3年度）である。
- 7 当報告書での用語は、以下のとおり統一した。

つき・・・「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん・・・「碗」「甌」があるが、「碗」を用いた。
- 8 当報告書で用いた遺構番号は、通番となっている。（以下に言う pitを除く）

また、番号の頭には、見た目の性格により以下の略記号を付けた。

S B	: 掘立柱建物	S H	: 竪穴住居	S F	: 土師器焼成坑
S D	: 溝	S K	: 土坑	pit	: 柱穴、小穴
- 8 当報告書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。
10. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前言	(西村)...	1
II 位置と歴史的環境	(山田)...	2
III 調査の成果～層位と遺構～	(西村)...	6
IV 調査の成果～出土遺物～	(西村)...	16
V 結語	(西村)...	21

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡地形図	4
第3図 調査区位置図	4
第4図 A・B地区遺構平面図	5
第5図 下層調査区位置図	9
第6図 SK15平面・立面図	9
第7図 SB8平面・立面図	10
第8図 SK5・6平面・立面図	10
第9図 SH19・20平面・立面図	11
第10図 SB9・10平面・立面図	11
第11図 SB11平面・立面図	12
第12図 SB21・22平面・立面図	12
第13図 SB23平面・立面図	13
第14図 SF4・13・17平面・立面図	14
第15図 出土遺物実測図(1)	17
第16図 出土遺物実測図(2)	18

表目次

第1表 旧石器時代遺物一覧表	13
第2表 遺構観察表	15
第3表 遺物観察表	19

図版目次

図版1 A地区中心部、B地区中心部	図版6 SB11、SF4
図版2 SK15・SD16、SK15遺物出土状況	図版7 SF13、SF17
図版3 SB8、SB8柱穴1遺物出土状況	図版8 出土遺物(1)
図版4 SH19・20・SB22、SH19カメラ	図版9 出土遺物(2)
図版5 SK5・6、SB9・10	図版10 出土遺物(3)

I 前 言

1 調査の契機

曾祢崎遺跡は、多気郡明和町に所在する周知の遺跡で、遺跡番号は明和町525である。近くには、曾祢崎古墳群1～4号墳（明和町526～529）がある。

県営ほ場整備事業（明星地区）により曾祢崎古墳群が破壊される恐れがあったので、平成6年12月12日に試掘調査（第3図1～4）を行った結果、4号墳は古墳ではないことが判明した。また、試掘坑1の部分で遺構・遺物が確認され、この部分にも遺跡がある可能性がでてきた。そのため、平成6年1月17日に第二次試掘調査（第3図5～20）を行った結果、遺構・遺物が確認され、曾祢崎遺跡の範囲が東方に広がっていることを確認し、本調査を行うことになった。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

本年度の調査は、事業により掘削される部分2か所の本調査と、事業により抜根を行う部分の工事立会を行い、曾祢崎古墳群の平板測量を行った。

調査に参加して頂いたのは明和町在住の方々である。ここに御名前を記し、御礼申し上げたい。

青木満子、荒木久貴、井上桂蔵、上村由兵衛、奥田よ志、尾西徳二、北村博、雲谷義蔵、竹本ひさあ、田端一子、田端文子、中瀬忠治、西尾肇、西功夫、西山京子、野村文吉、東谷露子、森下瀧雄、森せつ子、森美智子、山本静子

（順不同、敬称略）

(2) 調査日誌（抄）

- 4月24日 株式会社イビソクによるGPS測量。
- 4月26日 松阪農林事務所と事前協議。
- 5月8日 重機による表土除去。調査区周囲の水がしみ込む。
- 5月10日 A地区地区杭設定、プレハブ搬入。
- 5月17日 曾祢崎古墳群の測量。

- 5月18日 作業員初日、A地区遺構検出開始。
- 5月22日 S B 8 検出、このころから遺構続出。
- 5月29日 抜根作業の工事立会。
- 6月1日 A地区遺構検出・掘削続き。
B地区表土除去開始。
- 6月2日 A地区遺構写真撮影。
B地区地区杭設定、遺構検出開始。
- 6月6日 A地区実測用ポイント設置。
- 6月7日 A地区遺構写真撮影。
- 6月8日 A地区遺構実測。
- 6月12日 B地区重機による調査区拡張。
- 6月17日 現地説明会を開催、120名の来訪を得る。
- 6月19日 B地区実測用ポイント設置。
- 6月21日 A地区下層調査開始。
- 6月22日 A地区SF4断ち割り
B地区遺構写真撮影。
- 6月23日 B地区下層調査。
B地区SF13、SF17断ち割り。
作業員終了。
- 6月26日 B地区遺構実測。
- 6月27日 各種図面、調査終了。
プレハブ搬出。
- 6月28日 曾祢崎古墳群平板測量続き。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成7年4月7日付け教文第730号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
平成7年8月8日付け教文第222-46号（県教育長通知）

Ⅱ 位置と歴史的環境

1 位置

南伊勢地方の主要な河川である柳田川と宮川は紀伊山地を水源とし、ともに伊勢平野を通過して伊勢湾に注いでいる。両河川に挟まれた旧度会・多気郡域内には多くの良好な遺跡が存在している²⁾。

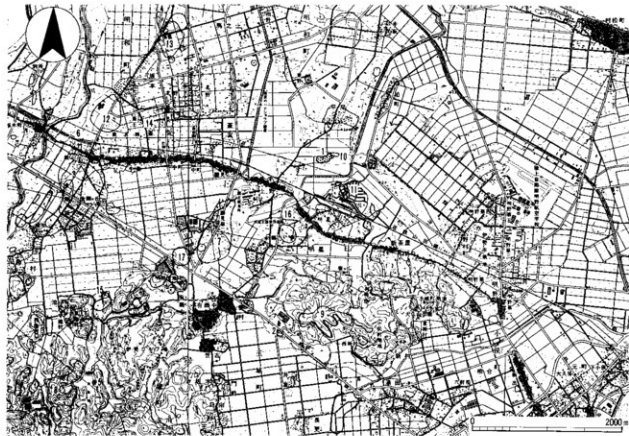
曾祇崎遺跡(1)は、多気郡明和町大字上野字曾祇崎に所在する。近鉄山田線明星駅の北方約500mにあり、伊勢市・小俣町との境に近い。周囲の地形は大仏山丘陵から延びる標高10m程度の明野台地が緩やかに伊勢湾寄りに傾斜しており、当遺跡はその中央部の中段丘上に位置する。当遺跡は明和町の遺跡詳細分布調査によって発見された³⁾。発見当初の遺跡範囲は東西100m、南北80m、当時の現況は畑であった。しかし、平成6年度にその東側の試掘調査を行ったところ、遺物及び遺構が確認されたので、遺跡の範囲が東側に150m拡張された。今回は、東

側に拡張された遺跡範囲のうちの1,300㎡の調査を行った。

2 歴史的環境

(1) 旧石器・縄文時代

この地域の旧石器時代から縄文時代初めにかけての代表的な遺跡として、玉城町カリコ遺跡(2)や小俣町ママ田遺跡がある。多量のナイフ形石器、尖頭器や剥片が表面採集されており、この地域の中核的な石器製作遺跡と考えられている³⁾。上述の遺跡のほかに、明野台地から大仏山丘陵にかけては多くの遺跡が確認されているが、ナイフ形石器・剥片の出土量は少量であり、ごく短期間に生活をしてきた跡と考えられている。縄文時代の遺跡として、金剛坂遺跡(3)、栗垣内遺跡(4)、章宮池遺跡(5)、上村池遺跡などがある。



第1図 遺跡位置図(1:50,000)

(国土地理院 松阪・明野 1:25,000から)

(2) 弥生時代

榑田川下流域では、金剛坂遺跡・栗垣内遺跡・古里遺跡^⑥（6）等がこの時期の集落として営まれる。特に明野台地西端部の金剛坂遺跡は弥生時代全般に渡って大規模なムラを形成する。また、大仏山丘陵にはほど近い北野遺跡（7）では、後期の堅穴住居と方形周溝墓が確認されている。

以上のことから、弥生時代の人々はこの明野台地周辺に連続と、ある一定のつながりを持って居住していたと考えられる。

(3) 古墳時代

この地域では、前期の古墳については現在のところ確認されていないものの、玉城町小杜遺跡からは石銅の表採が報告されており^⑧、前期古墳の存在が考えられている。中・後期になると、明和町・多気町・玉城町・小俣町・伊勢市にまたがる玉城丘陵には斎宮池古墳群（8）、天王山古墳群、神前山古墳群^⑨、上村池古墳群、河田古墳群などの大規模な古墳群が、大仏山丘陵には大仏山古墳群（9）が築かれるようになり、明野台地にも曾崎崎古墳群（10）、明星古墳群（11）、塚山古墳群（12）、板本古墳群（13）が

築かれる。

神前山1号墳からは画文帯神獸鏡が出土している。同型鏡は鳥羽市神島の八代神社、亀山市井田川茶臼山古墳、熊本市江田船山古墳、栃木県雀宮牛塚古墳など県内外の古墳から21面出土しており、畿内の古墳との関係を考える上で興味深い。

(4) 飛鳥から平安時代

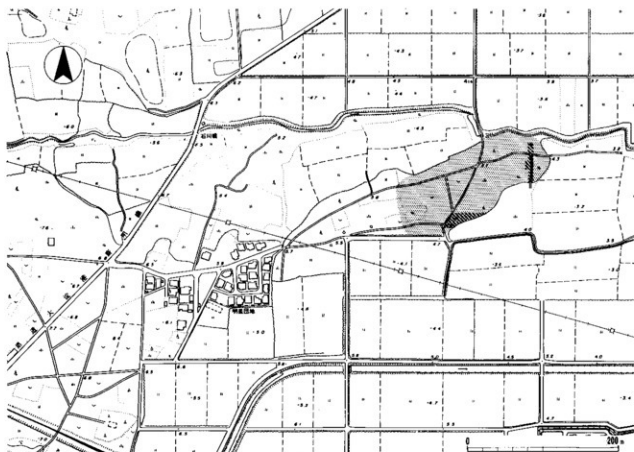
飛鳥から平安時代のこの地域を考えるときに念頭におかなければならないのが斎宮跡（14）である。斎宮は伊勢神宮の天照大神の御杖代として仕えた斎王（皇室の未婚の皇女）が常に生活した所である。斎宮については延喜式等の文献に見られ、また発掘調査によって地割りや倉庫群の存在が確認されている。

さて、明和町を中心にこの辺り一帯では多くの土師器焼成坑が見つかった。北野遺跡や戸峯遺跡（15）、本遺跡の南西1kmに所在する水池土器製作遺跡（16）、堀田遺跡（17）などがある。北野遺跡で焼成された土師器は斎宮跡から出土する土師器と類似しており、おそらく斎宮跡等に供給していたであろう。

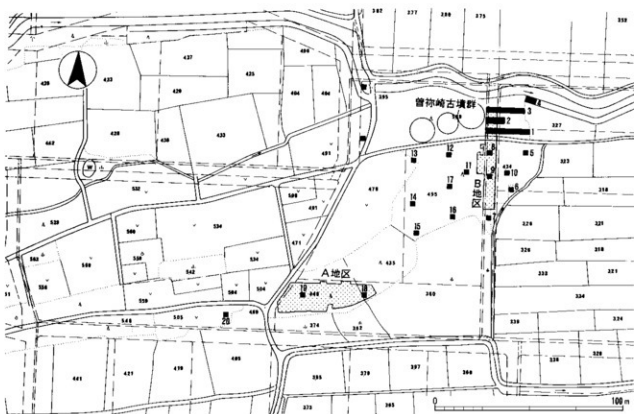
[註]

- ① 『松原市史』自然編（松原市史編さん委員会、1977年）
- ② 明和町斎宮跡保存対策室編『明和町遺跡地区』（明和町、1986年）
- ③ 森田幸伸『大仏山とその周辺のナイフ形石器について』（『研究紀要』1号「三重県埋蔵文化財センター」、1990年）
- ④ 谷本銀次『古里遺跡発掘調査報告-D地区-』（三重県文化財選覧、1974年）
- ⑤ 『古里遺跡-C地区』（『古里遺跡-天王宮跡-』三重県教育委員会1973年）
- ⑥ 山沢義典・谷本銀次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町郷土文化を守る会、1971年）
- ⑦ 田村隆一『金剛坂遺跡』（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1985年）
- ⑧ 田村隆一『北野遺跡』（『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 三重県埋蔵文化財センター、1991年）
- ⑨ 竹田憲治『北野遺跡（第5次）発掘調査再報』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

- ⑩ 岩中淳之『伊勢（南勢）・志摩のムラ』（『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会、1990年）
- ⑪ 泉字館大学考古学研究会『伊勢市とその周辺の古墳文化』（泉字館大学考古学研究会、1993年）
- ⑫ 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告書』（明和町教育委員会、1973年）
- ⑬ 下村登良男ほか『河田古墳群発掘調査報告書』（多気町教育委員会、1986年）
- ⑭ 奥義次ほか『明星古墳群発掘調査報告』（明和町教育委員会、1975年）
- ⑮ 樋口隆雄『古鏡』（新橋社、1979年）
- ⑯ 澄田正一『伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について』（『近畿古文化論』、権原考古学研究所編、1963年）
- ⑰ 伊藤久嗣・伊勢野久好『堀田遺跡』（『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、1981年）
- ⑱ 田村隆一『北野遺跡』（『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 三重県埋蔵文化財センター、1991年）
- ⑲ 竹田憲治『北野遺跡（第5次）発掘調査再報』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第4図 A・B地区遺構平面図 (1:200、土層図は1:100)

Ⅲ 調査の成果～層位と遺構～

1 調査の方法

(1) 調査区の設定と基準点の設定

当遺跡の調査に当たっては、南側の地区をA地区、北側の地区をB地区として調査を行った。

調査前に株式会社イビソクによるGPS測量と水準測量を行い、各調査区及び古墳群に国土座標の基準点7点及び水平基準点2点の振り込みを行った。

(2) 小地区の設定

各調査区内は、設定された基準点をもとに4m方眼を切り、A地区は北西からA1～、B地区はa1～として小地区を設定した。調査区の方眼は国土座標に合わせている。

(3) 下層調査の方法

調査中に、旧石器時代の遺物が出土した。この地域の旧石器時代の遺物は、縄文時代以降の遺構検出面である橙色系土を若干除去したところから出土するため、この面(上層)の検出・掘削終了後に下層の調査を実施した。

下層の調査は、上層で旧石器時代の石器が出土している地点およびその周辺を、小地区の1/4の範囲を設定し、小さな道具で少しずつの掘削を行った。

2 基本層序

調査区は、前述のとおり遺跡の東端で微高地端部に位置し、南東に向かって低くなっている。また、A調査区の東外側は湿地となっており調査期間中水没していた。そのため、A地区の東部とB地区の南部は常時水に浸かっており、必要に応じて排水を行いつながりの調査となった。

調査区の基本層序は、両地区ともに上から耕土、褐色系の包含層、橙色土となっている。橙色土を検出面として調査を行った。A地区の包含層の厚さは10～20cm、B地区は10cm程度で、両地区共に包含層からの遺物の出土は比較的希薄であった。

3 上層の調査(遺構)

竪穴住居2棟、掘立柱建物7棟、土師器焼成坑3基、溝2条および多数の土坑、ピットを検出した。時代は弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期、飛鳥から奈良時代の4時期に大分される。以下、各遺構についての特徴を述べるが、数値等は遺構観察表を参照されたい。

(1) 弥生時代中期の遺構

土坑1基を確認した。

SK15(第6図)

B地区の北部で検出した長さ5.1m以上の楕円形土坑である。最近まで使われていた溝SD16に切られる。土坑中央部床面から少し離れて弥生時代中期の壺3個体以上及び混入と考えられる前期の壺の口縁部が出土した。

(2) 古墳時代前期の遺構

土坑、ピットを検出した。

SK7(第4図)

A地区中央部北壁寄りで検出した、長径1.6m、短径1mの楕円形土坑である。S字状口縁台付壺やミガキが施された高杯などの古式土師器が出土した。

Pit1(第4図)

A地区の中央北壁付近で検出した。調査区内では建物としてまともでないが、調査区の北側にこのピットを使った建物が立つ可能性がある。S字状口縁台付壺などが出土している。

(3) 古墳時代後期の遺構

掘立柱建物1基、土坑2基を確認した。

A 掘立柱建物

SB8(第7図)

A地区の中央北壁付近で検出した総柱建物である。N-40°-Wの南北棟で、桁行3間(8.1m)、梁行3間(3.3m)、柱間は等間である。梁行方向の柱通

りは悪い。柱廻りは径60cmの円形である。柱痕跡はほとんどの柱穴で検出できた。柱穴1の柱痕跡からは土師器椀が横を向いた状態で出土している。廃絶後に投棄されたものであろうか。

B 土坑

SK5・SK6 (第8図)

A地区の東部で検出した、ほぼ平行する2基の楕円形土坑である。SK6は掘削後に2つに分かれたが、検出時点では同一の土坑と判断され、埋土も共通していたため、ここでは同一の土坑とする。埋土はSK5・6共に上層が黒色土、下層は灰黄褐色土であった。下層は使用中および廃絶後間もなく、上層はそれ以降の時期に一気に埋まった感がある。両土坑の間は約4mで、内側に当たる部分の傾斜が、外側に比べて急な角度になっている。SK5の下層から、ミニチュア土器と手づくね土器が出土している。

(4) 飛鳥から奈良時代の遺構

竪穴住居2棟、掘立柱建物5棟、土師器焼成坑3基および多数の土坑・ピットを検出した。

A 竪穴住居

SH19 (第9図)

B地区中央で検出した。西半分が調査区外にのびる。削平が激しくプランははっきりしない。柱穴は6個確認でき、うち2本は建て替えによるものと考えられるが、拡張か縮小かは不明である。SH20と切り合っており、区別できないままに一緒に掘削してしまったため、断面による前後関係ははっきりしない。SH19の主柱穴がSH20の壁を切っているため、SH19の方が新しいと考えた。北辺にカマドを持つが、削平が激しく東側袖の外側は検出できなかった。また、袖部分の断ち削りを行ったが、構架のラインは確認できなかった。カマドの床面は厚さ2cmほど被熱しており、この上から二次焼成を受けた壺の口縁部が伏せた状態で出土していた。支柱であらうか。カマド内からは土師器椀も出土している。

SH20 (第9図)

B地区中央で検出した。西半分が調査区外にのびる。短辺3.5m、長辺4mの方形の住居と考えられ、4個の主柱穴を確認した。東辺中央に焼土を検出し

たが、この部分は削平が激しくカマドの残骸である可能性もある。

なお、SH19・20の中央部で深さ20cm程度の不定形土坑が検出されたが、SH19・20の前後関係は明らかにできなかった。

B 掘立柱建物

SB9 (第10図)

A地区の中央部南壁寄り、SB10と一部重複して検出された側柱建物である。一部分は調査区外にのび、SB10に切られる。E-12°-Nの東西棟で、桁行4間(6.6m)、梁行3間(4.5m)で、桁行の柱間は両端が短く、梁行の柱間は等間である。1尺を30cmとすると桁行22尺、梁行15尺となる。土師器甕、土鍾等が出土した。

SB10 (第10図)

A地区の中央部南壁寄り、SB9と一部重複して検出された側柱建物である。一部は調査区外にのびる。SB9を切る。E-2°-Nの東西棟で、桁行4間(7.6m)、梁行3間(4.2m)で、桁行の柱間は等間、梁行の柱間は中央部だけ短くなっている。1尺を30cmとすると桁行6尺余、梁行14尺となる。須恵器杯身、土師器甕、土鍾等が出土した。

SB11 (第11図)

A地区の中央部北壁寄りで検出した側柱建物である。SK6を切る。N-6°-Wの南北棟で、桁行5間(7.8m)、梁行2間(3.6m)で、柱間は桁行の中央部のみ長い。1尺を30cmとすると桁行26尺、梁行12尺となる。柱穴1には、柱根が残っていた。須恵器甕、土師器椀・甕、土鍾等が出土した。

SB21 (第12図)

B地区の中央部西壁寄りで検出した側柱建物である。一部が調査区外にのびる。E-21°-Sの東西棟と思われる。桁行5間以上(6.75m以上)、梁行3間(4.05m)で、柱間は等しくない。1尺を30cmとすると梁行13.5尺である。土師器甕等が出土した。

SB22 (第12図)

B地区の中央部西壁寄りで検出した側柱建物である。一部は調査区外にのび、SH19・20を切る。N-8°-Eの南北棟と思われる。桁行4間(6.3m)、梁行3間以上(2.7m以上)で、桁行の柱間は両端が短い。1尺を30cmとすると桁行は21尺である。土師

器壺等が出土した。

S B 23 (第13図)

A地区の中央部で検出した総柱建物で、棟持柱を持つ。S B 9と一部重複するが、柱穴の切り合いはない。E-37°-Nの東西棟で、桁行3間(4.5m)、梁行2間(4.0m)で、柱間は等間である。1尺を30cmとすると桁行15尺、梁行6.5尺余となる。須恵器壺、土師器壺等が出土している。

C 土師器焼成坑

S F 4 (第14図)

A地区の中央部南壁寄りで見出した隅丸二等辺三角形の土師器焼成坑である。床面は三角形の底辺部から頂点部へ緩やかに高くなる。頂点部は南を向くが、付近の微地形は南に向かって緩やかに低くなっており、土師器焼成坑は等高線にはほぼ直行している。残りは悪く、検出面からの深さは15cmで、床面はあまり焼けていなかった。須恵器の小片と土師器壺が出土した。

S F 13 (第14図)

B地区の中央部北寄りで検出した、二等辺三角形の土師器焼成坑である。S D 14を切る。三角形の底辺部は直線状をなし、床面は底辺部から頂点部へ緩やかに高くなる。頂点部は南東を向くが、付近の微地形は南東に向かって緩やかに低くなっており、土師器焼成坑は等高線にはほぼ直行している。検出面からの深さは15cmで、床面の残りはよく、深さ3cmほど比熱して赤くなっていた。須恵器の小片、土師器碗・壺および円形の土錘、炭が出土している。

S F 17 (第14図)

B地区の中央部南寄りで検出した隅丸二等辺三角形の土師器焼成坑である。床面は三角形の底辺部から頂点部へ緩やかに高くなる。頂点部は南東を向くが、付近の微地形は南東に向かって緩やかに低くなっており、土師器焼成坑は等高線にはほぼ直行している。検出面からの深さは15cmで、床面直上に炭の層を検出した。土師器壺、炭などの他、不明土製品も出土した。

D 溝

S D 14 (第4図)

B地区北部で検出した。E-34°-Nの方角で蛇行して流れている。遺物は土師器片が少量出土している

のみであるが、S F 13に切られており、それ以前のものであることがわかる。

E 土坑

S K 1 (第4図)

A地区西部で検出した長径1.3m、短径1.1mの楕円形土坑である。須恵器壺と土師器壺の小片が出土した。

S K 2 (第4図)

A地区西部、S K 1の南で検出した長径1.4m、短径1mの楕円形土坑である。土師器壺の小片が出土した。

(5) 時期不明の遺構

溝1条、土坑1基がある。

A 溝

S D 16 (第4図)

B地区北部で検出した。東から弧を描いて北に流れる。遺構面からの深さは1m以上と深い。地元の方の話によれば、東側の水田から北側の小川に流れ込む排水路で、県営は場整備以前まで使っていたものではないかということであった。

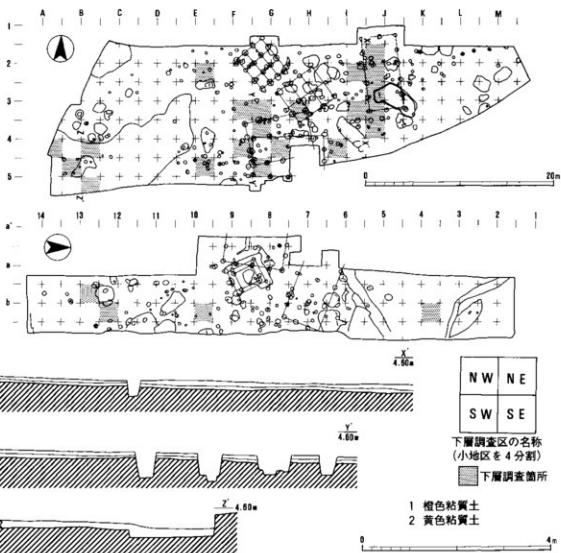
B 土坑

S K 3 (第4図)

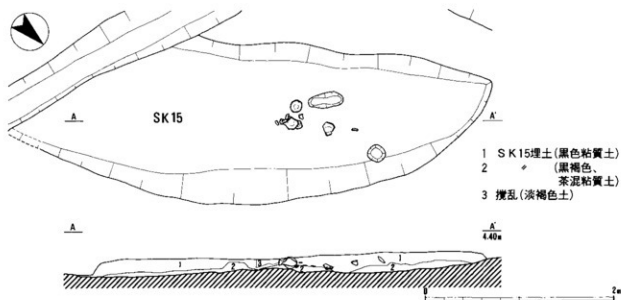
A地区北西隅で検出した。西、北側が調査区外にのびるが、楕円形土坑であろう。掘削時に水が湧き出し、完掘できなかった。近世のものと思われる磁器が出土した。

4 下層の調査

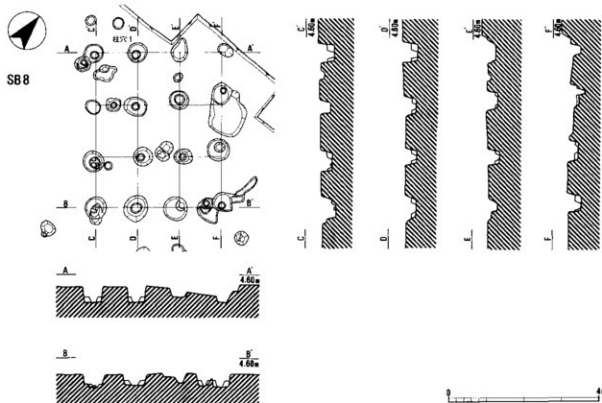
上層の調査終了後に、前述の方法により下層の調査を行った。その結果、製品の出土はなかったが、第5図の③の部分からチャート製の主体とする剥片が出土した。各出土地点と出土品の内容は第1表のとおりである。



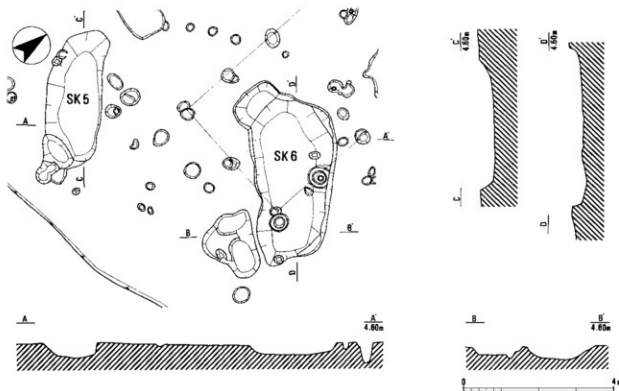
第5図 下層調査区位置図 (1:400、土層図は1:80)



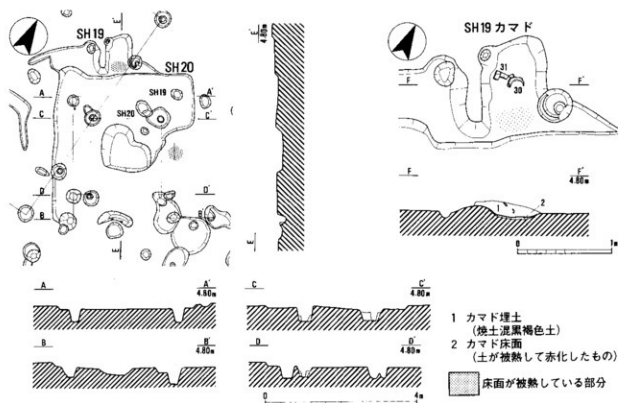
第6図 SK15平面・立面図 (1:40)



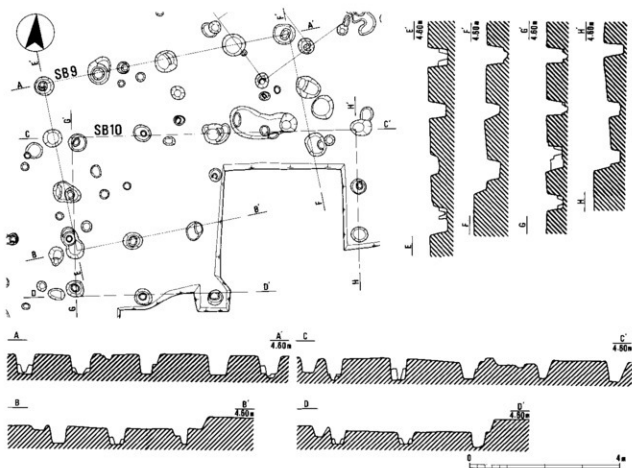
第7图 SB8平面·立面图(1:100)

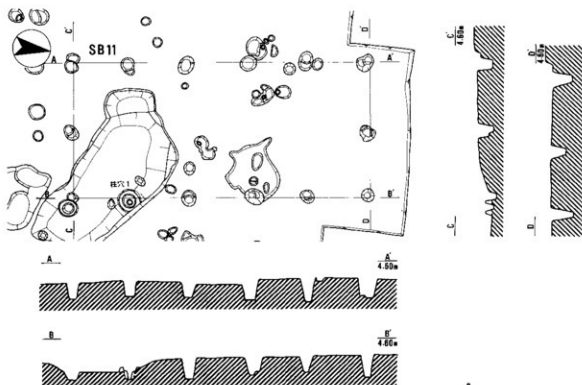


第8图 SK5·6平面·立面图(1:100)

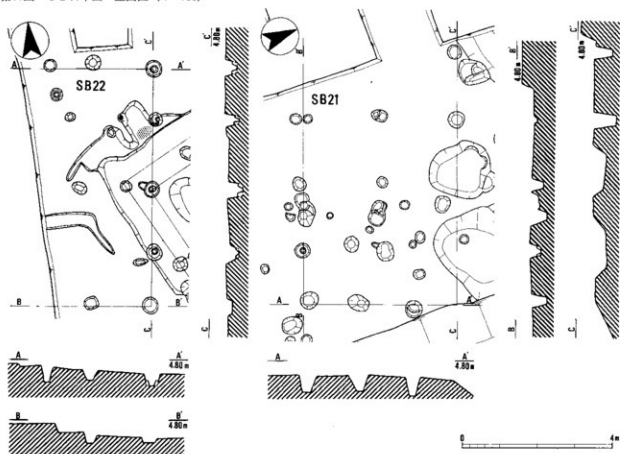


第9図 SH19・20平面・立面図 (1:100 SH19カマド部分のみ1:40、土器の数字は出土遺物実測図と同じ)

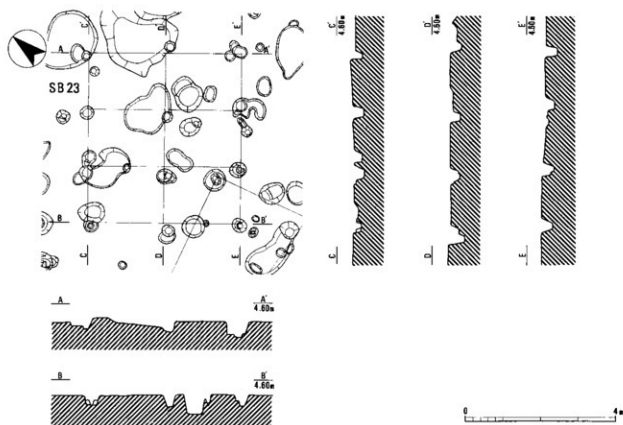




第11图 SB11平面·立面图 (1:100)



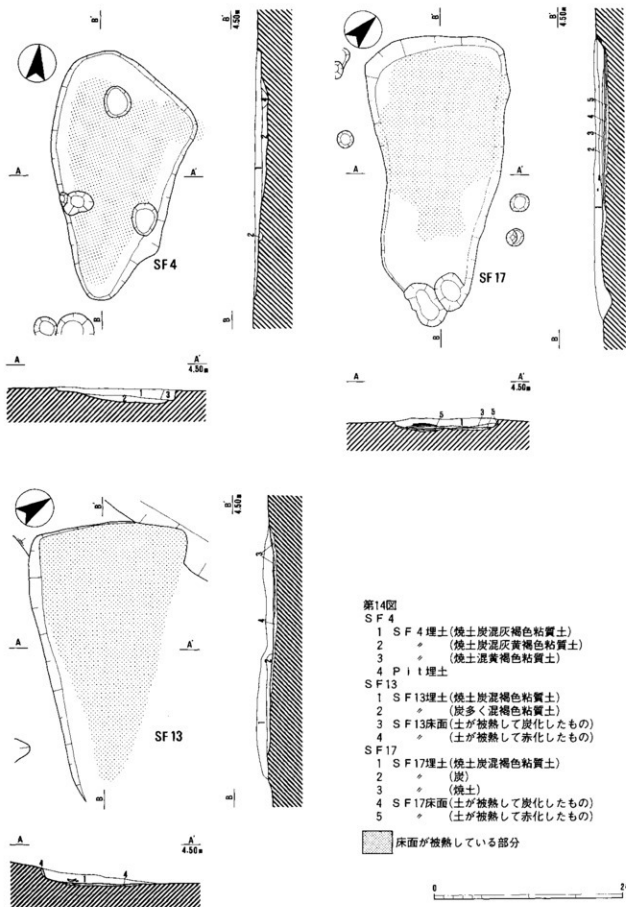
第12图 SB21·22平面·立面图 (1:100)



第13図 SB23平面・立面図 (1:100)

No	調査区	取り上No	北から南への距離(m)	西から東への距離(m)	標高(m)	器種	石材	備考
1	A 4 SE	1	170	110	4.17	剥片	頁岩	
2	B 4 NW	1	150	178	4.20	剥片	チャート	
3	F 3 SE	1	152	28	4.16	剥片	チャート	
4	F 4 NW	1	153	83	4.05	剥片	チャート	
5	I 2 NW	—	—	—	—	剥片	チャート	
6	I 2 NW	—	—	—	—	剥片	チャート	
7	I 2 NW	—	—	—	—	細片	チャート	
8	I 1 SE	—	—	—	—	剥片	チャート	
9	F 3 Pit 5	上層の遺構検出・掘削中に出土				剥片	チャート	二次調整あり?
10	I 3 Pit 5		〃			細片	チャート	
11	E 2 Pit 1		〃			石核	チャート	
12	B 7 包		〃			剥片	チャート	
13	D 4 包		〃			剥片	チャート	
14	D 4 包		〃			細片	チャート	
15	F 4 包		〃			細片	チャート	
16	F 4 包		〃			細片	サヌカイト	
17	G 4 包		〃			剥片	チャート	
18	I 2 包		〃			剥片	チャート	
19	a 8 包		〃			剥片	チャート	
20	a 12 包		〃			剥片	チャート	
21	b 1 包		〃			剥片	チャート	
22	b 12 包		〃			細片	チャート	
23	b 12 包		〃			細片	チャート	
24	地区外		〃			不定形石核	チャート	

第1表 旧石器時代遺物一覧表 (実測図以外のもの)



第14図 SF 4・13・17平面・立面図 (1:40)

竪穴住居

遺構名	規模 (東西×南北) (m)	平均深さ (cm)	方向(長軸 を中心に)	カマド・ 焼土の位置	主 柱 穴 掘 形			主柱穴 柱径 (cm)	時 期	備 考
					形状	径(cm)	深(cm)			
S H 19	不明×不明	10	N25° W	カマド・北辺	円形	約30~40	35	15	7世紀代	S H 20より新しい
S H 20	3.5×4.0	10	N25° W	焼土・東辺中央	円形	約40	40	不明	7世紀代	

掘立柱建物

遺構名	規模 桁×梁間	総柱・ 側柱の 別	桁行(m) 柱間 (北からもしくは西から)	梁行(m) 柱間(北から もしくは西から)	棟方向	柱 穴 掘 形			柱径 (cm)	時期	備 考
						形状	径(cm)	深(cm)			
S B 8	3間×3間	総柱	8.1 2.7+2.7+2.7	3.3 1.1+1.1+1.1	N40° W 南北棟	円形	約60cm	約30cm	約20cm ~30	6世紀後半	梁行方向の柱 通りが塞い
S B 9	4間×3間	側柱	6.6 1.5+1.8+1.8+1.5	4.5 1.5+1.5+1.5	E12° N 東西棟	円形	約50cm ~60	約50cm	約25cm ~30	6世紀末~ 7世紀初頭	
S B 10	4間×3間	側柱	7.6 1.9+1.9+1.9	4.2 1.5+1.2+1.5	E 2° N 東西棟	円形	約40cm ~50	約50cm	約20cm	6世紀末~ 7世紀初頭	S B 9より新 しい
S B 11	5間×2間	側柱	7.8 1.5+1.5+1.8+1.5+1.5	3.6 1.8+1.8	N 6° W 南北棟	円形	約40cm	約50cm	約15cm	6世紀末~ 7世紀初頭	S K 6・7よ り新しい
S B 21	5間×3間 以上	側柱	6.75以上 ?+1.8+1.8+1.65+1.5	4.05 1.35+1.35+1.35	E21° S 東西棟	円形	約40cm ~50	約50cm	約15cm	7世紀後半	
S B 22	4間×3間 以上	側柱	6.3 1.35+1.8+1.8+1.35	2.7以上 ?+1.2+1.5	N 8° E 南北棟?	円形	約40cm	約30cm ~40	約15cm ~20	7世紀後半	S H 21, 22よ り新しい
S B 23	3間×2間	総柱	4.5 1.5+1.5+1.5	4.0 2.0+2.0	E37° N 東西棟	円形	約30cm ~40	約30cm	約15cm ~20	6世紀後半 ~末	

土師器焼成坑

遺構名	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	長軸方向	出 土 遺 物			時 期	備 考
					須恵器	土師器	そ の 他		
S F 4	2.9	1.5	15	N 4° E	瓶類	甕		飛鳥~奈良時代	
S F 13	2.9	1.6	15	E30° S	瓶類	甕・柄 粘土塊・土鎌・炭		7世紀後半~8世紀初頭	S D 14より新しい
S F 17	3.1	1.5	15	N45° W	なし	甕	不明土製・粘土塊・炭	7世紀後半~8世紀初頭	

溝

遺構名	幅(m)	長さ(m)	深さ(cm)	方 位	流れる方向	時 期	備 考
S D 14	1.2	8以上	15	E33° N	不明	古墳時代?	
S D 16	0.4~0.8	9以上	110	E14° SからN25° Wへ	東から北へ	近代	最近まであった水田の排水路

土坑

遺構名	規模 (m)	深さ (cm)	時期	備考
S K 1	(東西) 1.3× (南北) 1.1	15		
S K 2	(東西) 1.4× (南北) 1.0	5		
S K 3	(東西) 3.0以上	完全掘削せず	近世	
S K 5	(東西) 1.4× (南北) 3.6	40	6世紀後半	
S K 6	(東西) 2.3× (南北) 4.2	35	6世紀後半	
S K 7	(東西) 1.6× (南北) 1.0	5	古墳時代前期	
S K 15	(東西) 1.7× (南北) 5.1以上	15	弥生時代中期	

ピット

遺構名	取り上げ遺構名	径 (cm)	深さ (cm)	時 期	備 考
Pit 1	J 1 pit 1	35	20	古墳時代前期	
Pit 2	H 1 pit 1	30	25	6世紀代	

第2表 遺構観察表

IV 調査の成果～出土遺物～

1 旧石器時代の遺物（1～6）

ナイフ形石器（1・2）は、どちらもチャート製で、1は正面から見て左側縁に粗い背部調整が施されている。刃部には刃こぼれが認められる。2は右側縁と左側縁基部に背部調整が施されている。接器（3）はチャート製で、刃部は両面に調整を施している。4は頁岩製で、縦長剥片の両縁に二次調整が施されたもので、ナイフ形石器の可能性もある。先端と基部を欠損する。5はチャート製の二次調整のある剥片で、断面台形状をなす。刃部には刃こぼれ痕が認められる。6はチャート製の縦長剥片の石核である。礫皮面を残し、6面以上の剥片剥離面を持つ。

2 弥生時代中期の遺物

(1) SK15出土の遺物（7～11）

弥生時代中期（第IV様式）ごろの壺（7・10・11）と前期の甕の口縁部（8）が出土している。9は半截竹管文の中に竹管文を並べたもので、壺の胴部であろうか。

3 古墳時代前期の遺物

(1) Pit1出土の遺物（12・13）

S字状口縁台付甕（12）は、屈曲部に2条の沈線を持つもので、B類新段階からC類古段階と考えられる。土師器高杯（13）には、外面にいいえな磨きが施されている。

(2) SK7出土の遺物（14）

S字状口縁台付甕（14）は、12より若干新しく、C類古段階と考えられる。

4 古墳時代後期の遺物

(1) Pit2出土の遺物（15）

15は須恵器甕の口縁部と考えられる。小片のため詳細な時期は不明だが6世紀代のものであろう。

(2) SK5出土の遺物（16～22）

SK5の埋土は上下2層に分かれるが、16～18は

上層から出土している。16は須恵器高杯の杯部と考えられ、杯部にロクロによる波状文が施されている。18の土師器甕の口縁部はあまり外反せず、端部は面取りが施されている。6世紀後半のものであろうか。

19～22は下層の底部直上で確認したもので、すべてミニチュア製品である。何らかの祭祀に用いられたものであろうか。

(3) SK6出土の遺物（23～26）

SK6の埋土も上下2層に分かれるが、23～26は全て上層から出土している。23・24は共に陶器編年のMT85～TK43型式に併行するものである。土師器甕（25）の口縁部はあまり外反せず、端部は丸くおさまる。26の底部には、焼成前の線状のヘラ書きがみられる。

(3) SB8出土の遺物（27・28）

27は須恵器の壺もしくは甕の頸部と思われる。器壁は薄い。波状文が施されているが、模様は不揃いである。類似のものが大仏山32号墳から出土している。土師器椀（28）は、柱穴1の柱痕跡から横を向いた形で出土したもので、やや深めの椀である。6世紀後半のものか。

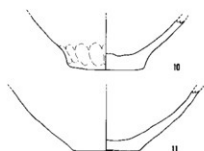
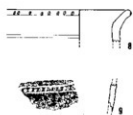
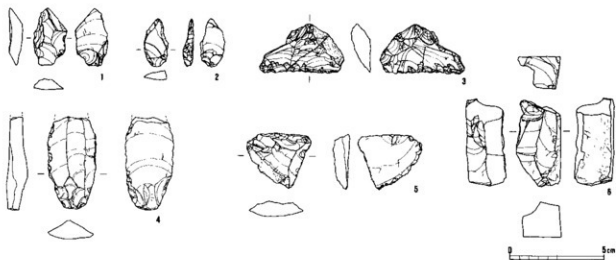
5 飛鳥時代から奈良時代の遺物

(1) SH19・20出土の遺物（29～32）

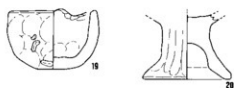
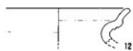
29～31は、SH19のカマド埋土から出土したものである。30は倒立した形で出土した。二次焼成をうけて赤くなっている。カマドの支柱に用いられたものと考えられる。土師器瓶（31）は口縁部のみ出土である。32は、口縁部が強く外反し、端部はつまみ上げられている。SH19とSH20を区別する前、一つの土坑としてとらえていた段階で出土したもので、いずれの堅穴住居に伴うのか区別できない。また、純粋なSH20出土の遺物は確認できなかった。これらの遺物は7世紀代のもと考えられる。

(2) SB9出土の遺物（33～35）

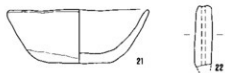
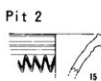
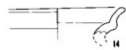
土師器甕（33）の口縁部は、あまり外反せず、端部には面取りが施されている。頸部は厚い。34は33よりも口縁端部に強いナデが行われ、端部がつまみ



Pit 1



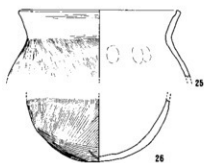
SK 7



SK 5



SK 6

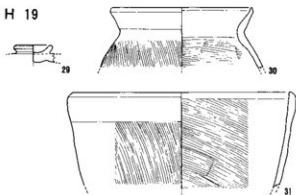


SB 8

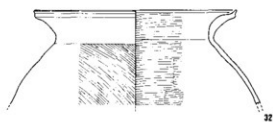


第15図 出土遺物実測図(1) (1:4 1~6・12・14・19~22のみ1:2)

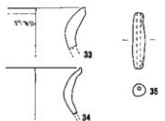
SH 19



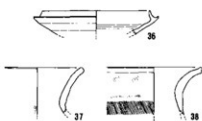
SH 19 · 20



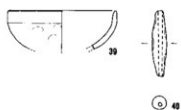
SB 9



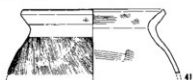
SB 10



SB 11



SB 21



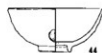
SB 22



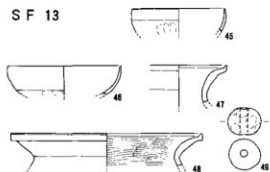
SB 23



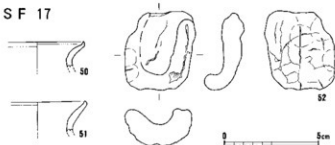
SD 16



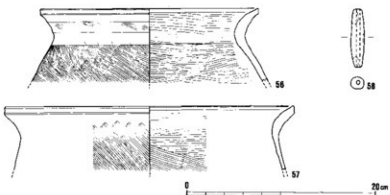
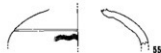
SF 13



SF 17



包含層



第16図 出土遺物実測図 (2) (1:4 52のみ1:2)

上げられている。土鍾 (35) は、円筒状のもので、粘土接合痕を残す。

(3) SB10出土の遺物 (36~38)

須恵器杯 (36) は陶邑編年TK209 型式に併行するものである。土師器甕 (37) は柱の掘形から出土したものである。口縁部はあまり外反せず長く、端部はナダられている。38は口縁部が強く外反し、端部はつまみ上げられている。

(4) SB11出土の遺物 (39・40)

土師器碗 (39) はやや深めで、丸味を帯びている。7世紀前半以前のものとできよう。土鍾 (40) は円筒状でオサエ跡が残る。

(5) SB21出土の遺物 (41)

土師器甕 (41) は口縁部が強く外反し、端部がつまみ上げられている。頸部はやや厚い。7世紀後半に位置づけられる。

(6) SB22出土の遺物 (42)

土師器甕 (42) は口縁部が強く外反し、端部がつまみ上げられている。7世紀後半に位置づけられる。

(7) SB23出土の遺物 (43)

須恵器甕 (43) の口縁部が出土している。6世紀末ごろのものであろうか。

(8) SF13出土の遺物 (45~49)

土師器碗 (45・46) はやや浅めで、ヨコナデ部分の割合が多い。土師器甕 (47・48) の口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。頸部は薄めである。7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。土鍾 (49) は球状のものである。

(9) SF17出土の遺物 (50~52)

土師器甕 (50・51) の口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。不明土製品 (52) は粘土塊を片手で握り、上からもう一方の手の指で凹ませたものである。

(10) SD16出土の遺物 (44)

磁器碗 (44) は明治期以降のものであろう。

(11) 包含層出土の遺物 (53~58)

須恵器杯 (53) は陶邑編年TK209 型式に併行するものである。54は53とはほぼ同じ口径を持つが、器高が高く、53の杯部が丸味を帯びているのに対し直線的な杯部を持つ。55は小形の須恵器壺の胴部であろうか。胴部に沈線と波状文を持つ。土師器甕 (56・57) は、やや強く外反する口縁部の端部に面取りを施したもので、頸部はやや厚めである。土鍾 (58) は円筒状のものである。

(註)

- ① 赤塚次郎『歴史通説』(愛知県歴史文化センター、1990年)
 ② 上村安生『北野遺跡出土遺物概要について』(『第1回発掘研究会資料』発掘研究会、1995年)

- ③ 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)
 ④ 大西実行ほか『大仏山3号墳(倉子古墳)発掘調査報告書』(玉城町教育委員会、1986年)

No	登録No	器種	出土位置	法量 [cm]	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎土・石材	焼成	色調	備考
1	015-01	ナイフ形石器	包含層 B-b3	身長:3.8 最幅:2.5 完形 最厚:0.9 重量:6.07g		左側縁に粗い背割調整	チャート	—	—	
2	012-01	ナイフ形石器	包含層 B-a7	身長:3.15 最幅:1.65 完形 最厚:0.7 重量:2.71g		右側縁と左側縁基部に背割調整	チャート	—	—	
3	016-01	鎌首	包含層 A-44	身長:3.3 最幅:5.6 完形 最厚:1.3 重量:19.9g		刃部の両面に調整	チャート	—	—	
4	014-01	二次焼成のある刺片	包含層 A-H4	身長:4.8 最幅:2.5 一部欠 最厚:1.0 重量:12.5g		縦長刺片の両面に二次調整	自然	—	—	ナイフ形石器の可能性
5	013-01	二次焼成のある刺片	包含層 A-J4	身長:3.7 最幅:4.2 完形 最厚:1.1 重量:14.68g		辺面に刃磨し	チャート	—	—	
6	013-02	石槌	包含層 A-E4	身長:5.8 最幅:2.9	—	6面以上の斜削断面をもつ	チャート	—	—	
7	003-01	須恵土器	SK15	口径:11.0前後 頸部:5.0前後	1/10 3/5	内:ナデ、口縁部刻文、胴部に無定形残 外:ナデ後縁部に刻文・波状文・窓状文	密、径1mmの砂少し混	灰	黄褐色	10YR5/2
8	004-01	須恵土器	SK15	口径:小片のため不明		内:ナデ 外:ナデ後縁部に沈線、口縁部に筋目目、黒染あり	密、径1mmの砂多量混	黄	灰褐色	10YR7/3
9	003-04	須恵土器	SK15	口径:小片のため不明		内:ナデ 外:ナデ後、平縁竹管文・竹管文	密、径1mmの砂少し混	黄褐色	灰褐色	10YR7/3
10	003-03	須恵土器	SK15	直径:7.9	完存	内:ナデ、オサエ 外:ナデ、オサエ、黒染あり	密、径1mmの砂少し混	黄褐色	灰褐色	10YR6/4
11	003-02	須恵土器	SK15	直径:6.8	小片	内:ナデ 外:ナデ後、黒染あり	密、径1mmの砂少し混	黄褐色	灰褐色	10YR5/4
12	010-08	土師器 S字状口縁白付壺	Pa1	口径:小片のため不明		内:ヨコナデ 外:ヨコナデ後、口縁下部に沈線2条	密	黄	灰白	5.YR6/4
13	001-06	土師器 鹿耳	Pa1	口径:14.0前後	1/4	内:ハナメ、ナデ 外:ハナメ、ていねいなミガキ	密	黄	黄	5.YR6/6
14	010-06	土師器 S字状口縁白付壺	SK7	口径:小片のため不明		内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	麩粉多量混入	黄	灰白	10YR6/4
15	011-01	須恵器	Pa2	口径:小片のため不明		内:ヨコナデ 外:ヨコナデ後、沈線、波状文	密、麩粉多量混入	やや不黄	灰白	5.Y7/1

第3表 遺物観察表(1)

No	登録No	名称	出土位置	法量 [cm]	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎土・石材	焼成	色調	備考
16	004-04	埴器部 高片	SK5	軒部最大径: 13.0前後	小片	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ、波状文、カキ目	密・微砂粒多 し混入	灰 灰5Y/1		
17	004-02	土師器 部	SK5	口径: 11.0前後	小片	内: ナデ、ヨコナデ 外: ナデ	密	灰 灰5Y/8		
18	004-03	土師器 部	SK5	口径: 小片のため不明	—	内: ナデ、ヨコナデ後、口縁にヨコハケ(5~6本/cm) 外: ナデ、ヨコナデ後、体部にタテハケ(5~6本/cm)	密・微砂粒多 し混入	灰 灰1C・黄褐色 7.5YR7/3		
19	001-05	手捏粘土 土器	SK5	口径: 4.6	完存	内: ナデ 外: オセエ、ナデ、磨成前の傷あり	密・微砂粒少 し混入	灰 灰黄褐色 10YR4/2		
20	002-04	ミニチュ ア土師 器部	SK5	底径: 4.2~4.8	完存	内: ナデ 外: オセエ、ナデ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰1C・黄褐色 7.5YR7/4		
21	002-03	ミニチュ ア土師 器部	SK5	口径: 7.5	ほぼ 完存	内: ナデ 外: ナデ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
22	001-04	土師質 土師	SK5	最大径: 3.3 最大厚: 0.9 穴径: 0.2 重量: 2.51g	少し欠 けあり	円筒状、ていねいなナデ調整 外面に磨成前の痕あり	密・微砂粒少 し混入	灰 灰7.5YR7/4		
23	002-01	須恵器 杯身	SK6	口径: 12.0前後	1/8	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ、ロクロナズリ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰黄褐色 10YR6/2		
24	002-02	須恵器 杯身	SK6	口径: 13.0前後 器高: 4.4	1/2	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ、ロクロナズリ	密・径1mmの 砂多し混入	灰 灰黄褐色 10YR6/1		
25	004-05	土師器 部	SK6	口径: 17.0前後	1/2	内: ナデ、ヨコナデ後、口縁にヨコハケ 外: ナデ、ヨコナデ後、体部にタテハケ(6~7本/cm)	密・微砂多し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
26	005-01	土師器 部	SK6	残存部最大径: 15.0	表面は ほぼ完 存	内: ナデ 外: ナデ (4本/cm)、焼成前のヘア跡もあり	微砂粒多し 混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
27	005-02	須恵器 鉢	SB8	口径: 13.5前後 器高: 5.5前後	口縁 1/4	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ後、波状文	密・微砂粒少 し混入	灰 灰白 2.5Y7/1		
28	001-05	土師器 部	SB8	口径: 13.5前後 器高: 5.5前後	口縁 1/2	内: ナデ、ヨコナデ 外: オセエ、ヨコナデ、ナデ、粘土状態残存、黒斑	微砂粒多し 混入	やや不 均質 灰黄褐色 10YR6/6		
29	007-03	須恵器 部	SH19	つまみ径: 4.0	ほぼ 完存	内: ロクロナデ、ナデ 外: ロクロナデ	密・微砂粒多 し混入	灰 灰 5Y/1		
30	007-01	土師器 部	SH19	口径: 15.0	完存	内: ヨコナデ、体部にヨコハケ(5本/cm) 外: ヨコナデ、体部タテハケ(5本/cm)	微砂粒多し 混入	灰 灰 7.5YR7/6		二次焼成 を受ける
31	007-04	土師器 部	SH19	口径: 26.0前後	口縁 1/3	内: ヨコナデ、体部にナメハケ(5本/cm) 外: ヨコナデ、体部にタテハケ(5本/cm)	微砂粒少し 混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
32	008-01	土師器 部	SH19 20	口径: 22.0前後	口縁 3/4	内: ヨコナデ後、口縁までヨコハケ(5本/cm) 外: ヨコナデ、体部にナメハケ(5本/cm)	微砂粒少し 混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/3		
33	009-02	土師器 部	SB9	口径: 小片のため不明	—	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ後、口縁部にナメハケ(6本/cm)	微砂粒多し 混入	灰 灰黄褐色 10YR6/2		
34	009-01	土師器 部	SB9	口径: 小片のため不明	—	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ、オセエ、粘土状態残存	微砂粒少し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
35	009-03	土師質 土師	SB9	最大径: 6.0 最大厚: 1.3 穴径: 0.3 重量: 19.96g	少し欠 けあり	円筒状 オセエ、ナデ調整、タテ方向の整合残存	微砂粒少し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
36	009-04	須恵器 杯身	SB10	口径: 11.5前後	小片	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰黄褐色 2.5Y7/1		
37	009-06	土師器 部	SB10	口径: 小片のため不明	—	内: 磨成が厳しく不明 外: タテハケ(6本/cm) 濃く残存	微砂粒多し 混入	灰 灰黄 2.5Y8/3		
38	009-05	土師器 部	SB10	口径: 小片のため不明	—	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ後、タテハケ(14本/cm)	微砂粒少し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/3		
39	010-02	土師器 部	SB11	口径: 11.5前後	口縁 1/8	内: ヨコナデ、ナデ 外: ヨコナデ、オセエ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
40	010-01	土師質 土師	SB11	最大径: 7.0 最大厚: 1.5 穴径: 0.3 重量: 12.4g	円筒状 オセエ、ナデ調整	内: ナデ調整 外: オセエ、ナデ調整	密・微砂粒少 し混入	灰 灰 7.5YR7/6		
41	010-03	土師器 部	SB21	口径: 14.5前後	口縁 1/2	内: ヨコナデ、口縁部・体部にヨコハケ(6本/cm) 外: ヨコナデ、体部にタテハケ(8本/cm)	微砂粒少し 混入	灰 灰黄 2.5YR/4		
42	010-04	土師器 部	SB22	口径: 小片のため不明	—	内: ヨコナデ、口縁部にヨコハケ(5本/cm)	微砂粒多し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
43	010-05	須恵器 部	SB23	口径: 12.0前後	口縁 1/4	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ	密・微砂粒多し 混入	灰 灰 N4.0/6.0		
44	010-07	須恵器 部	SD16	口径: 10.0前後	口縁 1/5	内: 陶輪、体部に円形文様、高台内面も陶輪	緻密	灰 灰白 10Y8/1		
45	005-04	土師器 部	SF13	口径: 10.0前後	口縁 1/4	内: ヨコナデ、ナデ 外: ヨコナデ、オセエ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
46	005-03	土師器 部	SF13	口径: 12.0前後	口縁 1/8	内: ヨコナデ、ナデ 外: ヨコナデ、オセエ	密・微砂粒少 し混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
47	006-02	土師器 部	SF13	口径: 小片のため不明	—	内: 磨成が厳しく不明 外: ヨコナデ	微砂粒少し 混入	やや不 均質 灰黄褐色 10YR7/6		
48	006-01	土師器 部	SF13	口径: 22.0前後	口縁 1/8	内: ヨコナデ、口縁部からヨコハケ(6本/cm)、黒斑 外: ヨコナデ	微砂粒多し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		
49	006-03	土師質 土師	SF13	最大径: 2.8 最大厚: 3.5 穴径: 0.8 重量: 25.2g	完存	円筒状 オセエ調整	微砂粒多し 混入	灰 灰黄褐色 7.5YR7/8		
50	006-05	土師器 部	SF17	口径: 小片のため不明	—	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	微砂粒多し 混入	灰 灰黄色 7.5YR4/4		
51	006-06	土師器 部	SF17	口径: 小片のため不明	—	内: 磨成が厳しく不明 外: 磨成が厳しく不明	微砂粒少し 混入	灰 灰 7.5YR7/6		
52	006-04	土師質 不明土製 品	SF17	最大径: 4.2 最大厚: 3.5 重量: 2.1 重量: 0.9	完存	円筒状 外: 手で溜った跡が、ヒビが残る	密・微砂粒少 し混入	灰 灰黄褐色 7.5YR7/8		
53	011-07	須恵器 杯身	包含層	口径: 12.5前後 器高: 3.6受部径: 15.0前後	受部 1/3	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ、ロクロナズリ	密・微砂粒多 し混入	灰 灰 7.5YR/1		
54	011-03	須恵器 杯身	包含層	口径: 12.0前後 器高: 4.4受部径: 15.0前後	受部 3/8	内: ロクロナデ 外: ヨコナデ、ハコ切り未調整	微砂粒多し 混入	灰 灰黄褐色 2.5Y7/2		
55	011-05	須恵器 杯身?	包含層	口径: 不明	—	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ、波状文	密・微砂粒少 し混入	灰 灰 N6/0		
56	001-02	土師器 部	包含層	口径: 23.0前後	口縁 1/6	内: 口縁部・体部にヨコハケ(6本/cm) 外: ヨコナデ、体部にタテハケ(6~7本/cm)	微砂粒多し 混入	灰 灰1C・黄褐色 10YR7/4		
57	001-01	土師器 部	包含層	口径: 30.5前後	口縁 1/8	内: ヨコナデ、体部にヨコハケ(6本/cm) 外: ヨコナデ、体部にナメハケ(6~7本/cm)	微砂粒多し 混入	灰 灰 7.5YR7/5		
58	011-04	土師質 土師	包含層	最大径: 6.2 最大厚: 1.4 穴径: 0.4 重量: 10.7g	完存	円筒状 オセエ、ナデ調整	微砂粒少し 混入	灰 灰黄褐色 10YR8/4		

第3表 遺物観察表(2)

V 結 語

1 SK5・6について

SK5・6は、位置や埋没状況から密接に関係する遺構であると考えた。これらの性格については、古墳の周溝である可能性も考えられるが、全局しておらず、残っている溝の深さや、縦断面の傾斜状況からも周溝ととらえるには問題がある。また、検出面は橙色系で、埋土は黒色土と明確であり、見落としは考えられない。以上のことから別の土坑とするのが妥当であろうか。

SK5の底付近からミニチュア土器が出土しており、何らかの祭祀、あるいは埋葬が行われた可能性も考えられる。次年度以降に予定されている曾祢崎古墳群の調査が注目される。

2 建物の変遷について

A地区では、6世紀後半に倉庫と思われるSB8が建てられ、その後6世紀末から7世紀初頭にかけてSB9→SB10の順で住居と思われる建物が建てられている。SB11の詳細な時期は不明だが、6世紀後半のSK5・6を切っており、SB9・10とはほぼ差のない時期と見てよいだろう。SB23も出土遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、6世紀代とおもわれる須恵器が出土しており、SB9と重複関係にあることから、6世紀後半から末頃で、SB9以前のものの可能性が高い。

B地区は7世紀前半から後半にかけてSH20→SH19と変遷し、その後7世紀後半ごろにSB21・22が建てられる。

[註]

① 上村安生「東海の土師器生産と土師器焼成坑」（『第1回竊跡研究会資料』竊跡研究会、1995年）

以下、建物と土師器焼成坑との関連について触れておく。SF4からは土師器の小片しか出土しておらず、詳細な時期は不明である。近くにあるSB9・10とは位置的には同時存在は可能であるが、確認できない。SF13・17は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるもので、SB21・22より新しい。

3 土師器焼成坑について

今回出土した土師器焼成坑は、その形態や分布から、当地域で多数発見されているものと同類のものと考えられる。曾祢崎遺跡周辺の微地形をみると明野台地上の、北野遺跡から北東に伸びる尾根状地形の東端に位置している。曾祢崎遺跡での土師器焼成坑は、いずれも緩やかな傾斜地に、等高線に直行して頂点を等高線の下方向に向けて立地している。

時期は、7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるが、この時期は、北野遺跡で生産が最盛期を迎える時期である。

土師器焼成坑はいずれも単独で、それぞれの間が離れた状態で検出された。この状況は、北野遺跡などの土師器焼成坑集中地帯とは若干異なった感じを受ける。未調査部分に土師器焼成坑群がある可能性も残るが、土師器焼成坑は、主に丘陵斜面や裾部に立地していることが多く、台地の頂部にあたる未調査部分に大規模な土師器焼成坑群が存在したとは考えにくい。曾祢崎遺跡では、北野遺跡や戸峯遺跡のようにまとまった分布をもたず、小規模な生産が行われていたのであろうか。

竹田憲治「北野遺跡（第5次）発掘調査概要」中の土師器焼成坑分布図（『第1回竊跡研究会資料』竊跡研究会、1995年）

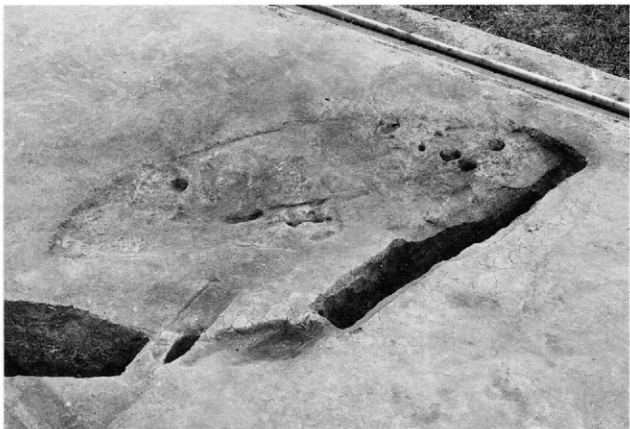
图版 1



A 地区中心部



B 地区中心部



S K 15・S D 16

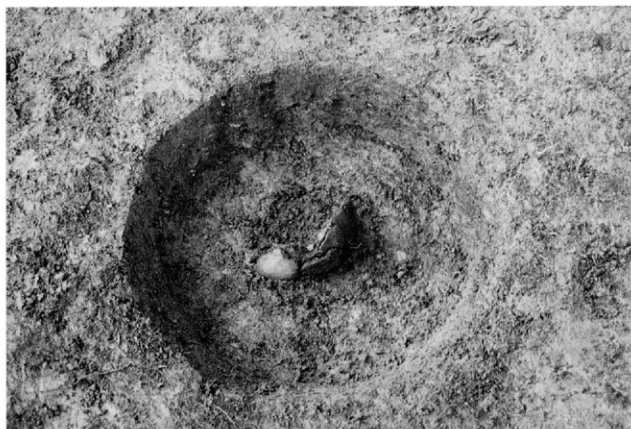


S K 15遺物出土状況

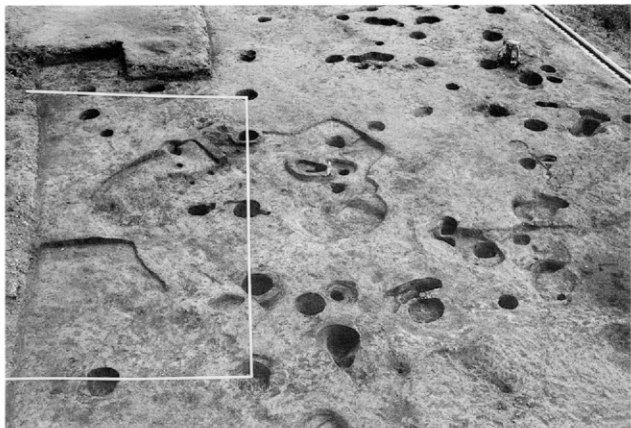
图版 3



SB 8



SB 8 柱穴 1 遺物出土状況



SH19・20・SB22



SH19カマド

图版 5



SK 5 · 6



SB 9 · 10



SB11

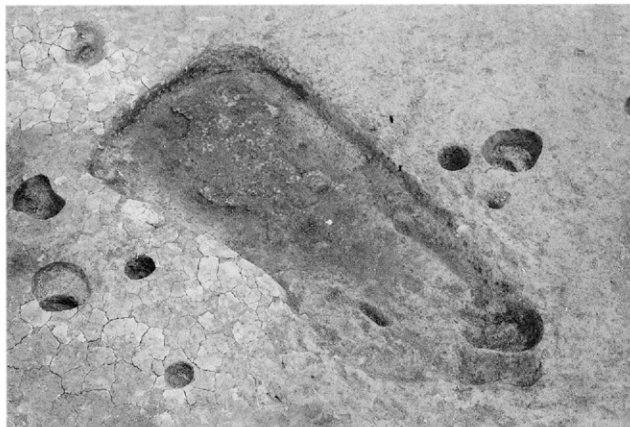


SF 4

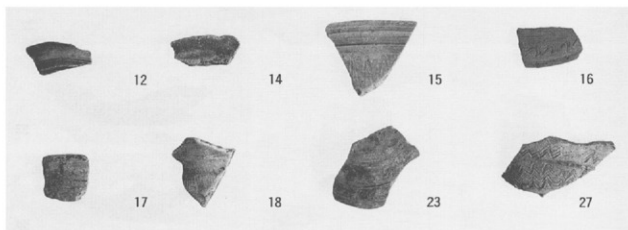
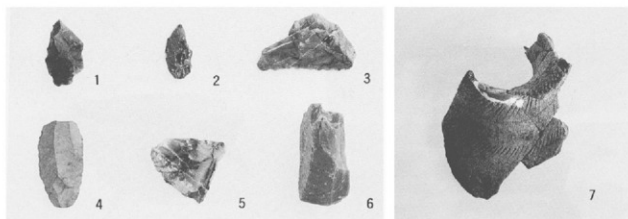
図版 7



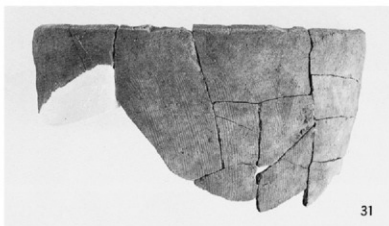
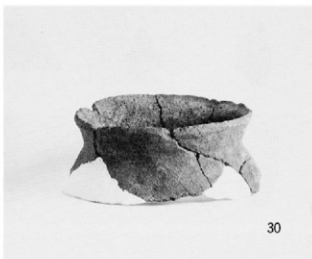
S F 13

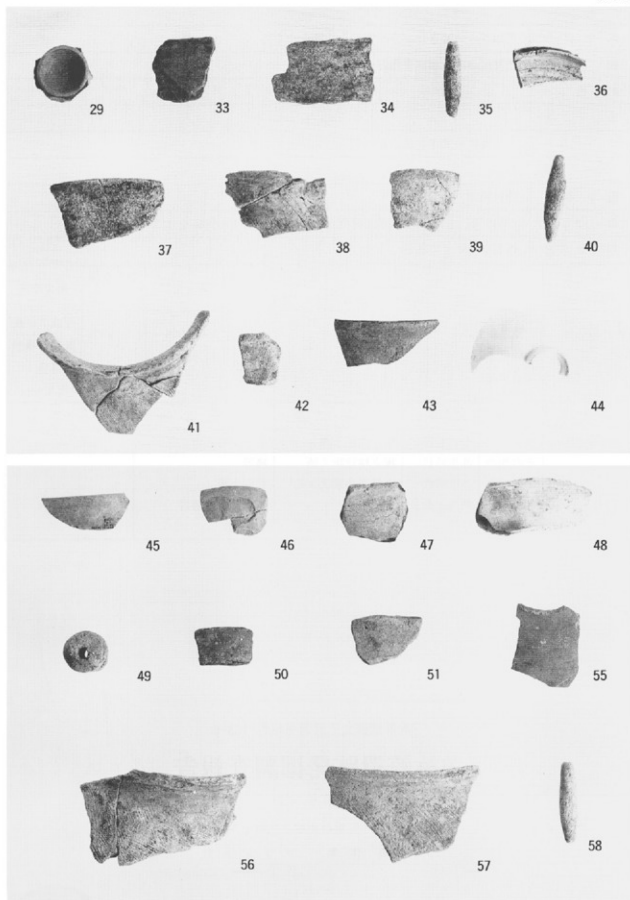


S F 17



出土遺物 (1)





出土遺物 (3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	そねぞきいせきはつくつちょうさほうこく							
書 名	曾祢崎遺跡発掘調査報告							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	133-6							
編 著 者 名	西村美幸、山田康博							
所 在 地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
曾祢崎遺跡	三重県多気郡 明和町上野 字曾祢崎	24442	228	34° 32' 00"	136° 38' 40"	19950508～ 19960628	1,300	平成7年度 県営は場整備事業 (明星地区)
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
曾祢崎遺跡	集落 その他の 生産遺跡	旧石器時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥・奈良 時代	竪穴住居2棟 掘立柱建物7棟 土師器焼成坑3基	ナイフ形石器 搔器 弥生土器 須恵器・土師器 土鏟				

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 133-6

曾祢崎遺跡発掘調査報告

1996. 3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 (有)第一プリント社